

研究ノート

# 「雁」における中国文学についての考察

王 憶 氷

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Chinese Literature in *The Wild Goose*

WANG Yibing

**Abstract:** Ogai Mori's novel *The Wild Goose* (1911-13) is set during the early Meiji period. Two pieces of Chinese literature are mentioned in the novel: i.e., the *Yuchu* novels and *The Golden Lotus*. Previous studies discussing the meaning of Chinese literature in *The Wild Goose* mainly focused on the similarities of figures and storylines between novels. This study aims to research the changes in figures and descriptions in *The Wild Goose*, beginning with a study of the changes in the heroine, which imply the ending of *The Wild Goose*. The connection between the depiction of the two worlds of medical students and civilians in *The Wild Goose* and *The Golden Lotus* is also examined.

**Keywords:** Mori ogai, Wild Goose, Chinese literature, Yuchu Novels, The Golden Lotus

## 1 はじめに

「雁」における『虞初新誌』の意味を論じた先行研究は、人物像が「雁」にもたらした影響という観点から行ったものが多い。林淑丹は「森鷗外『雁』の文学的背景としての『虞初新誌』<sup>1</sup>で「『小青傳』のヒロインは唯一の気の合う才子のいない佳人で」「『雁』の岡田はそのためか、更に、小青が気に入って、可愛がりたくなる」とお玉と小青の人物像の類似を指摘している。同氏による「鷗外文学における「奇」<sup>2</sup>では、「鷗外は中国の伝奇小説で特に「奇」なる人物像に関心を寄せ」「岡田とお玉の人物像には、それぞれ大鉄椎と小青とが重ね合わされ、重層化されている」と述べており、「奇」という視点から人物像を論じている。

『金瓶梅』の場合は、「雁」には『金瓶梅』の「色模様」があるという竹盛天雄氏<sup>3</sup>の代表的な論をはじめ、人物像、小説の仕組み、イメージが「雁」に

もたらした影響等が論じられる。千葉俊二氏は「窓の女」考—『雁』をめぐって<sup>4</sup>で「語り手「僕」は「神話」的英雄譚や『金瓶梅』の物語を引用し、それらが喚起する鮮烈なイメージや枠組みを借りながら、巧妙にそこから「雁」という全く新たな一つの物語を紡ぎ出すのである」と指摘した。浦川美紀氏は「森鷗外『雁』論—『金瓶梅』をめぐって<sup>5</sup>で、「昔からちょうどいいことがなければ物語にならない」という『金瓶梅』の台詞を借り、岡田から聞いた話とお玉から聞いた話を『金瓶梅』によって結びつけた。「僕」と岡田を引き合わせた『金瓶梅』はお玉と金蓮を岡田の意識の中で引き合わせるといふ僕の手法により「雁と云ふ物語」に仕立てられた」と言い、作品の枠組みについて論じた。林淑丹氏は「森鷗外『雁』と『金瓶梅』—物語の交錯<sup>6</sup>で「才子」との出会いを夢見つつ悲境に耐える小青的な道と、性的満足を求めて男性遍歴を繰り返す金蓮的な生き方との狭間で、危うい均衡を保っているのが、岡田を待つ時のお玉の状態と言える」と指摘し、お玉の人物像と小青、金蓮の関連から考察を行った。

従来の先行研究では、「雁」の中の『虞初新誌』『金瓶梅』についての考察は人物像、ストーリーの類似を中心に行われてきた。本論では、小青像の変化と「雁」における書生側と庶民側の描写を注目し考察を進めていきたい。

「雁」は明治44(1911)年にはじまり大正5(1916)年に書き終わる鷗外の小説である。明治44(1911)年九月から大正2(1913)年5月までに「壺」から「式拾壺」が『スバル』に鷗外という署名で連載された。大正4(1915)年5月に「式拾式」から最終章の「式拾肆」を加え、単行本『雁』を靑山書店から森林太郎という署名で刊行された。『雁』は東京大学医学部生の「僕」によって語られる。高利貸末造の妾であるお玉が、窓の外を通る同じ医学部生の岡田と会釈し、恋心を持つようになった。後にお玉は蛇退治をしてくれた岡田に話かけようと決心したが、重なった偶然によって失敗した。

「雁」の中で言及される中国文学作品は『虞初新誌』『金瓶梅』『左伝』の三つである。鷗外小説の中の中国文学が登場するものとして、作品名が明記され作品の主題とある程度の関連が見られものと、典拠とする作品名が記されず、古典に由来する表現が使われるものの二種類がある。「雁」の中の三つの中国文学は作品名が明らかである点から、前者に該当する。しかし、三つの文学作品のうち、『左伝』が触れられるのは「僕は度々振り返って見たが、あの女はいつまでも君の後影を見てゐた。おほかたまだこつちの方角を見て立

つてあるだろう。あの左傳の、目迎へて而してこれを送ると云ふ文句だねえ。」という一文だけである。また、『左伝』という作品は「雁」の主題と直接的な関わりはなく、そこに由来する表現が使われるという点では後者に近い傾向にある。本論では、「雁」に登場する中国文学のうち、前者の特徴をもつ『虞初新誌』『金瓶梅』を取り上げ、作品における意味について考察を行う。

## 2 『虞初新誌』

主人公である岡田が好きな文章として『虞初新誌』巻一の「小青伝」がある。まず、お玉の人物像と「小青伝」の関連から見てみたい。作中において「小青伝」は、岡田の理想とする女性像を示すものとして言及されている。

同じ虞初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。その傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闕の外に待たせて置いて、徐かに脂粉の粧を擬すとでも云ふような、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしたであらう。女と云ふものは岡田のためには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してゐなくてはならぬように感ぜられた。(参)

この小青の人物像は「可哀らしい娘」で「いつも身綺麗にしてゐて、着物も小ざつぱりとした物を着て」、妾になるお玉の人物像に重なる部分が見える。二人の人物像の共通点と相違点について考察することで、岡田の理想女性である小青が、現実に出会った女性のお玉の人物像に与えた影響を探ってみよう。まず、小青の話から見よう。

小青は美しく才覚に優れていて、素敵な女性の中でも、その抜群の智慧が輝いていた。16歳の時、ある風情を解しない金持ちの妾となった。その本妻が嫉妬深い女性で、小青を遠いところの別荘において、許可がなければ旦那と会うのは許されない。そうした状況のなかで、小青は自分の個性を抑圧して自己表現をしないように生活していた。本妻の親戚で、小青に碁の芸を学んでいたある婦人が小青に同情し、別の縁を結ぶように小青に勧めたが、小青はすべてが運命だと思い断った。小青は悲しみを詩に託しながら、次第に衰弱していく。本妻から薬と偽って送られてくる毒を捨てて、この世から去ることを願い、潔く死ぬののだといった。ある日絵師をよんできて、自身の容姿も内面もよく表された絵を描かせ、かたみとして残した。そして、「小青、

小青、この世にあなたの縁があるのだろうか」と言い、慟哭して亡くなった。この時も小青はいつものように美しく装っていた。小青は数少ない詩を残して18歳で亡くなった。

小青とお玉の共通点として、まず挙げられるのは、二人とも寂しい空間に置かれているという点である。妾である小青は正妻から嫉妬され、孤山の別荘に住まわされ、正妻の命令がなければ旦那が行っても入ることができない(非吾命而郎至不得入、非吾命而郎手札至亦不得入)<sup>7</sup>。正妻の命令がなければ旦那の手紙が送られても、見ることができない。小青を理解してくれる本妻の親戚筋の婦人は遠いところに嫁いだ。このような状況にあって、小青は寂しさと苦しさを詩に託すしかない。

お玉の無縁坂の寂しい家は、小青のような孤山の別荘ではないが、周囲の人に顔を見られるのが厭で、いつも一緒に住んでいた父は近くに住んではいないが、妾奉公しているので父の処に行くことは遠慮していた。お玉は気持ちを語る相手を失い、隣の裁縫を教えている女の家は賑やかであるのに対し、この家は寂しく見える。寂しい空間に置かれ、話す相手もなく暮しているお玉の境遇が、岡田の理想女性である小青と重なり、「岡田の同情を動かした」一つの要素となっていると考えられる。

また、岡田は自らの理想とする女性像として「どんな境遇にも安んじて、その美しさ、愛らしさを護持してはならぬ」ことを求めている。小青は病で益々持ちこたえなくなって、水も飲まず、食事もとれなくなり、毎日わずかな梨汁を飲むだけであった。それでも、化粧をして美しく装うようにつとめ、つつみを帯びて斜めに座る(然病益不支、水粒俱絶、日飲梨汁盞許。益明妝治服、擁襟欵坐)。小青は酷い仕打ちを受ける苦境に立っても、美しさを維持している。小青は自身の悲劇を知り、変えることのできない絶望的な心境にあっても、美しさだけは諦めることができない。それは、自身の美しさを周囲に誇る積極的な美しさではなく、消極的で絶望的な美しさである。

お玉も始終美しさを維持しているが、その美しさの性質は作中において変化している。父と二人で生活していた時のお玉は次のように描かれている。「貧しさうな家には似ず、此娘がいつも身綺麗にしてゐて、着物も小ざつぱりとした物を着てゐた」(肆)。

末造と出会って以後、お玉は時間が経つにつれて、子供から女に変わって

更に美しくなった。「ふつくりした圓顔の、可哀らしい子だと思つていたに、いつのまにか細面になつて、體も前よりはすなりとしてゐる。さつぱりとした銀杏返しに結つて、こんな場合に人のする厚化粧なんぞはせず、殆ど素顔と云つても好い。それが想像してゐたとは全く趣が變つてゐて、しかも一層美しい」(漆)。

岡田と最初に会つた時のお玉はすでに無縁坂の格子戸に住んでいて、美しさは相変わらずであるが、寂しさを帯びていた。「併し結び立ての銀杏返しの鬢が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、どこの加減か額から頬に掛けて少し扁たいやうな感じをさせるのが目に留まつた」(貳)。

ここまで、お玉の美しさは子供から女に変化し、やや寂しい感じを帯びてくるが、美しさを維持している点は変わっていない。岡田と出會つて、特に蛇退治事件の後、お玉の岡田に対する感情が急激に変化し、岡田が最初の「ほしいもの」から「買いたいもの」になった。岡田への恋心が目覚めたため、お玉は一層美しくなった。「一體お玉はは無縁坂に越して來てから、一日一日と美しくなるばかりである。最初は娘らしい可哀さが気に入つてゐたのだが、此頃はそれが一種の人を魅するやうな態度に變じて來た」(貳拾壹)。

変わり続けるお玉の美しさはここから、小青とずれ始めた。「人を魅するやう」な積極的な目的を持って、美しく見せようとするようになった。このようなお玉の美しさが頂点に達するのは、お玉と岡田がすれ違つた最後の場面である。

家の前にはお玉が立つてゐた。お玉は妻れてゐても美しい女であつた。しかし若い健康な美人の常として、粧映もした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう變つてゐるか、わからなかつたが、兎に角いつもと丸で違つた美しさであつた。女の顔が照り赫いてゐるやうなので、僕は一種の羞明さを感じた。(貳拾貳)

岡田に話かけようと決心し、岡田の通りを家の前で待つていた時のお玉は、「僕」から見ればいつもと違つた美しさがある。その日、末造が千葉に出張し、お玉は女中の梅を親元に歸して、誰にも邪魔されない時間を得て、岡田に告白しようと思つた。決心したお玉は愉快で、「追手を帆に孕ませた舟のやうに、志す岸に向つて走る氣になつた」。恋の告白への期待を抱え、お玉は異様に輝いた。お玉の美しさは岡田への恋心の深化によって進歩していたこ

とがうかがえる。

岡田が最初に会った時のお玉はやや寂しい笑顔をしている。それはまさに岡田の同情を動かした理想女性の小青と重なる。しかし、物語が進行するにつれて、お玉の寂しい美しさは次第に人を魅するような輝いた美しさになり、岡田の理想とする女性像と離れていった。「雁」に描かれたお玉と岡田の恋の悲劇は、偶然の重なりによる必然という読みが、ほぼ定説となっている。小青とお玉の人物像を照らし合わせて考えてみると、最初は岡田の理想とする女性像に近かったお玉が、徐々にそこから離れていく。その美しさの変質も、恋物語の破綻を暗示していると言えるのではないだろうか。

次に、岡田の好きなもう一つの文章である「大鉄椎伝」と岡田の行動様式の点から考察を行いたい。「雁」の「壺」から「参」で岡田のことが紹介され、「参」では岡田が好きな文章として『貞初新誌』の「大鉄椎伝」が挙げられる。

岡田は貞初新誌が好きで、中にも大鐵椎傳は全文を誦誦することが出来る程であった。それで餘程前から武藝がしてみたいと云ふ願望を持つてゐたが、つひ機会が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕をし始めてから、熱心になり、仲間に推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が発展したのであつた。(参)

武芸が抜群な大鉄椎のことを読んで、武芸がしてみたいという願望を持つようになり、競漕に熱心になったのもそれと関連があるという記述から考えると、岡田は小説の人物から受けた刺激は、精神面にとどまらず、実際の行動にも反映されているといえる。小説に感銘を受けた岡田は、それを現実にも可能な形で実現している。

このことを踏まえた上で、ふたたび「小青伝」に目を向けたい。岡田の好きな文章として「小青伝」を挙げた後、本文はこのように続けられている。

岡田は窓の女に會釋をするやうになつてから餘程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようとしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、圍物だらうとは察した。併し別段それを不快にも思はない。名も知らぬが、強ひて知らうともしない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のゐる時は女に遠慮をする。さうでない時は近處の人や、往來の人の人目を憚る。とうとう庇の蔭になつてゐる小さい木札に、どん

な字が書いてあるか見ずにみたのである。(参)

「大鉄椎伝」が好きで競漕を始めたのとは異なり、理想とする女性である小青と多くの共通点を持つお玉と現実で出会っても、積極的な行動を見せなかった。岡田の大鉄椎への関心は、大鉄椎その人への関心というより、武芸が抜群な点や、無口だが果敢に行動する点への憧れによるものといえる。「大鉄椎伝」は岡田の目指すところと繋がっているからこそ、現実生活に影響を与えている。それに対して、小青は理想的な女性として選ばれたが、それを現実求めてはいなかった。実生活で理想的な女性と出会っても、付き合いに発展させるべく行動を起こそうとは思わないのである。

岡田は二つの中国文学を好みながら、それぞれ異なる対応をとっており、個人の成長や生き方に関することには積極的に行動するのに対し、恋愛に関することには関心は示すものの積極的には行動していない。「雁」の始まりにおいて、岡田の読書の描写はある程度その後岡田の選択を暗示している。岡田は勉強家ではないが、「均衡を保った書生生活」を送って、「級の中位より下には下らずに進んで来た」。結末部分で岡田には、洋行とお玉との恋愛という選択肢が用意されるが、彼の好む二つの中国文学への対応の違いから、既に答えが示されているといつてよい。

また、「大鉄椎伝」は人物造形を補填する役割も果たしている。主人公の大鉄椎は武芸に優れ、慎重で無口な人物で、同じく武芸に優れ人望があるという宋将軍という人物のところへ行ったが、後に宋将軍が期待していたような立派な人物ではないことをわかって、離れることを決める。引き止める宋将軍に、財宝を奪われた盗賊が復讐に来るため、周りに被害を及ぼすことのないよう自分が離れると断ったが、武芸に誇りを持つ宋将軍は自身も戦いに行くと言った。夜になり、広い野原に大鉄椎が一人で三十人程の盗賊を切った。それを見て呆気にとられる宋将軍を後に、大鉄椎は、「我去矣」(林淑丹氏の翻訳によると、「われ去らん」になる)と言って離れて二度と帰ってこなかった。

「大鉄椎伝」は抜群に武芸にすぐれた大鉄椎の話である。岡田と大鉄椎の関連については、二人は「寡言で果断」「文武両道の人」だという共通点があると指摘されている。<sup>8</sup>

「大鉄椎伝」の文章も簡潔で勢いがある。「均衡を保った書生生活」を送っ

て、「信頼すべき男」である岡田が、「大鉄椎伝」を一番好きな文章として選ぶのも理解できるだろう。また、大鉄椎は言葉にはしないが、自分の求めるものがはっきりしている。才能のある人についていきたいと考え、宋将軍のところに来たが、期待通りの人物ではないことがわかると、ためらうことなく離れることを決めた。自分なりに明確な価値観を持ち、それに従って行動するのだ。岡田がこういった人物に共鳴を感じているのならば、岡田も同じように自身の判断を信じ、ためらわずに行動するタイプの人間であると、その愛読書から想像することが可能である。

「岡田を主人公にしなくてはならぬ」と作者は言ったが、岡田の描写は少ない。「壺」から「貳拾肆」のなかで、「壺」から「参」には岡田の容貌、学業の状況、散歩の路線、読書生活などが紹介されていたが、お玉と末造側の庶民階層の描写とは対照的に、岡田には内面の描写もみられず、実際に生活している場面の描れてはいない。行動の様子や会話を交わす場面によって、人物像を示す場面はあまり描かれておらず、抽象的な記述によって、紹介されている感じがする。岡田に関する記述は少なく、愛読書である「大鉄椎伝」の大鉄椎という人物が、岡田をどう捉えるかということの手掛かりにもなっており、人物像を補足する役割を担っているといえる。

### 3 『金瓶梅』

『金瓶梅』と「雁」の関係については、人物像とストーリーの類似に着目して論じられることが多い。一方で、「人物像が余りにも掛け離れており、対比することは無理と思われる」といった指摘もある。『金瓶梅』の金蓮にお玉を結び付けたのは、お玉の娼婦化を描くためではなく、岡田が女に誘われる事を暗示しているのである。『金瓶梅』は、異性への憧れを表し、金蓮にあったという発想は、まさに女色の運がついたことに他ならない。<sup>9</sup>

「雁」では「岡田を主人公にしなくてはならぬ」と語られていたが、実際には岡田にまつわる記述は少ない。むしろ高利貸の末造とお玉の生活ぶりや心理状態がこまごまに描かれていた。岡田と「僕」が生きていた医学部生の世界と、お玉、末造、お常、お玉の父親の庶民階層の世界がそれぞれ描かれている。「壺」から「参」までは、下宿屋に住んでいた岡田と「僕」のことが書かれているが、「肆」から「拾伍」までは、お玉の身の上や末造が高利貸になる経緯から描かれ、お玉が末造の妾になるまでの経過、妾になったあとにお



玉親子の心理状態、妾問題をめぐって末造とお常の家庭紛争などが詳細に言及されている。結末に至る「式拾式」から「式拾肆」の三章においても、岡田の登場は「拾陸」でお玉の隣に住むお貞によって、いつも会釈する青年の名前は岡田だということが判明したことと、「拾捌」「拾玖」のお玉のために末造の蛇退治だけであった。

岡田の住む世界とお玉の住む世界という、二つの世界があることを踏まえて『金瓶梅』の意味を考えてみたい。作中で『金瓶梅』が登場する場面は三カ所ある。「僕」と岡田は隣同士で、二人ともよく古本屋に足を運ぶので、そのうち言葉を交わすようになった。岡田が古本屋で見つけたが買わなかった『金瓶梅』を「僕」が買って、後で読みたいといった岡田に貸した。「こんなふうで、今まで長い間壁隣に住まいながら、交際せずにいた岡田と僕とは、いったり来たりするようになったのである」。岡田と「僕」は文学趣味のある青年で、香奩体の詩を読み、「漢文学者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がって読む」。年が一つ違う医学部の学生の二人は、本の趣味も合い、似たような読書経験があり、『金瓶梅』という小説に対して抱く感覚も共通するところがあると想定できる。

『金瓶梅』は明の時代の長編小説で、『水滸伝』の中の西門慶と潘金蓮が武松によって殺された場面を再編したもので、二人は殺されず、金蓮が西門慶の第五夫人となり、物語は百回まで続く。『金瓶梅』というタイトルは作中三人の女性「潘金蓮」「李瓶児」「龐春梅」の名前から一字ずつとったものである。西門慶の六人の夫人や家の下女、娼妓の間の欲望まみれの男女の日常生活が描かれる。

父の薬屋を相続した西門慶は、さらに薬屋、糸屋、呉服屋、塩問屋、運送屋までに商売を広げ、娘を都の大官の親類に家に嫁がせ、県庁にも出入りするようになり、提刑所の理刑（警察・刑獄をつかさどる役所の副長）となる。栄華をきわめるが、西門慶の急死によって西門一家は離散し、金蓮は武松によって殺され、一家のそれぞれの末路が語られる。各階層に渡る社会生活の描写もあるが、性の描写も多いため淫書とされていた。各階層の社会や男女が描かれ、性生活も色濃く描かれたこの小説に対して、似たような社会的身分や読書経験を持つ岡田と「僕」は、共通した感覚を持っているといえよう。<sup>10</sup>

冒頭の三章における書生生活の紹介の後、「肆」から話がお玉と末造の側に移り、『金瓶梅』が続いて登場するのは蛇退治の「拾捌」「拾玖」となる。

「(前略) 僕は空が曇つたり晴れたりしてゐるもんだから、出ようかどうしようかと思つて、とうとう午前中間寝轉んで、君に借りた金瓶梅を読んでゐたのだ。それから頭がぼうつとして來たので、午飯を食つてからぶらぶら出掛けると、妙な事に出逢つてねえ。」岡田は僕の顔を見ずに、窓の方へ向いてかう云つた。

「どんな事だい。」

「蛇退治を遣つたのだ」岡田は僕の方へ顔を向けた。

「美人をでも助けたのぢやないか。」

「いや。助けたのは鳥だがね、美人にも關係してゐるのだよ。」

「それは面白い。話して聞かせ給へ。」(拾捌)

雲が慌ただしく飛んで、物狂ほしい風が一吹二吹衝突的に起つて、街の塵を捲き上げては又息む午過ぎに、半日讀んだ支那小説に頭を痛めた岡田は、どこへ往くと云ふ當てもなしに、上條の家を出て、習慣に任せて無縁坂の方へ曲がつた。頭はぼんやりしてゐた。一體支那小説はどれでもさうだが、中にも金瓶梅は平穩な敘事が十枚か二十枚かあると思ふと、約束したやうに怪けしからん事が書いてある。(拾玖)

これもまた岡田と「僕」の間の会話であり、お玉のために蛇退治の前の場面である。「肆」から「拾漆」までのお玉と末造側の描写の後、場面は岡田の住む書生の世界へと移る。岡田は、「僕」から借りた『金瓶梅』を読み、頭がぼんやりとした状態で、お玉と接した。恋物語の主人公である岡田とお玉が会話を交わしたのは、蛇退治の場面のみである。この場面は、岡田の住む書生世界とお玉の住む庶民世界の接続した唯一の場面といえる。この二つの世界を繋ぐものとして、『金瓶梅』の世界がある。『金瓶梅』には社会の現実問題の描写もあるが、欲望にまみれた男女の世界もある。「金瓶梅は平穩な敘事が十枚か二十枚かあると思ふと、約束したやうに怪けしからん事が書いてある」という記述からみると、書生たちは『金瓶梅』を男女の欲望の世界として受け止めていたと捉えられる。『金瓶梅』に対して、おそらく「僕」と同じような捉え方をしていた岡田は、その感覚を持って、お玉と接した。

次に『金瓶梅』に触れられるのは、「拾玖」の終わり、「僕」は岡田の蛇退治のことを聞いた後、「僕は岡田の話聞いて、單に神話らしいと云つたが、實は今一つすぐに胸に浮んだ事のあるのを隠しめた。それは金瓶梅を讀みさして出た岡田が、金蓮に逢つたのではないかと思つたのである」(拾玖)という部分である。

「僕」がお玉を金蓮に重ねて見たことが何を意味しているか、前述した二つの世界の描写を踏まえて考えてみたい。まず「雁」の描写から見てみよう。小説の冒頭から三章に渡って「僕」と岡田の生活を含む書生の世界が描かれ、その後岡田が登場するのは、小説結末の「貳拾貳」から「貳拾肆」まで、蛇退治の「拾捌」「拾玖」の全二章とお玉が岡田の名前が知った「拾陸」の数行のみである。一方でお玉の住む庶民世界は、お玉の身の上や妾になる経緯、そしてその過程のなかで、お玉が悔しがり、あきらめ、一種独立した気持ちになるところが描かれたように、心境の変化と日常生活の様子が細かく書かれている。お玉だけでなく、末造、お常、お玉の父親もその置かれている状況をどう対応するかという心境の描写も詳細である。

具体的な生活の様子が描かれる庶民世界の描写と比べて、書生側の世界の描写はやや抽象的である。しかも「僕」の心理活動は描かれていたが、岡田の内面に関しては一切書かれていない。こうした状況の中で、岡田の読書は、岡田に関する情報の乏しさを補足する役割を果たしている。岡田は『金瓶梅』を読んだ後にお玉と出会った。岡田と「僕」は『金瓶梅』を男女の欲望を描いた小説として読んでおり、「僕」はお玉を金蓮に当てはめる。同じ読書感覚を持っている岡田も、お玉に男女関係の発展を考えたことがあると推測できるだろう。つまり、岡田の心理状態が直接的に書かれることがないが、その愛読書から心理描写の空白を埋めることができる。『金瓶梅』のなかの金蓮は、夫の武大に不満を持ち、武松と西門慶を誘惑し、西門慶の第五夫人となった後に、また西門慶の嬖である陳経済と不倫に落ちるような複雑な男女関係を辿る女である。お玉を金蓮に当ててみたことから、岡田はその男女関係の発展や恋愛の可能性を思い描かなかったわけではないと考えられる。

#### 4 おわりに

本論では、まずお玉と小青、岡田と大鉄椎の人物造形を分析し、「小青伝」「大鉄椎伝」を提示することによって、恋物語の破綻を暗示していると読み取れ、また「大鉄椎伝」は人物造形を補填する役割も果たしたと考える。続いて、「雁」における書生と庶民の両世界の描写の違いを『金瓶梅』を結びつけて、『金瓶梅』の登場したことで岡田の心理描写の空白が埋められたのではないかという結論に辿りついた。

『虞初新誌』『金瓶梅』の小説「雁」における役割を考察してきたが、『虞初

新誌』『金瓶梅』は鷗外の他の小説や文芸評論のなかでも数回触れられたことがあり、特に『虞初新誌』は鷗外初期の文芸評論から後期の小説までに数回登場し、鷗外にとって親しみのあり重視される作品の一つであると考えられる。同時代作家における中国小説がどのように読まれているかを踏まえた上で、鷗外文学における二つの作品の意味を考えることを今後の課題としたい。

## 注

<sup>1</sup> 林淑丹 「森鷗外『雁』の文学的背景としての『虞初新志』」『鷗外』 第64号 1999年1月

<sup>2</sup> 林淑丹 「鷗外文学における「奇」」『人間文化論叢』 第5号 2003年3月

<sup>3</sup> 竹盛天雄 『鷗外 その紋様』 小沢書店 1984年7月

<sup>4</sup> 千葉俊二 「「窓の女」考—『雁』をめぐって」『森鷗外研究』 第2巻 1988年5月

<sup>5</sup> 浦川美紀 「森鷗外『雁』論—『金瓶梅』をめぐって」『方位』 第21号 2000年3月

<sup>6</sup> 林淑丹 「森鷗外『雁』と『金瓶梅』—物語の交錯」『鷗外』 第69号 2001年7月

<sup>7</sup> 「小青伝」の引用は『虞初新誌』清張潮輯 荒井公廉訓点 岡田茂兵衛印 文政6年刊行（鷗外文庫書入本画像データベースに画像あり）により、以下引用文同様

<sup>8</sup> 林淑丹 「森鷗外『雁』と『虞初新志』の「大鉄椎伝」」『比較文学・文化論集』 第17巻 2000年2月

<sup>9</sup> 坂井田ひとみ 「『雁』—『金瓶梅』の意味するもの—」『愛知淑徳大学国語国文』 第18号 1995年3月

<sup>10</sup> この段落に出ている官名、店舗名の翻訳は『中国古典文学大系 金瓶梅』（小野忍・千田九一訳 平凡社 1969年12月）を参考にした